音読テキスト「日本の名文」12

小さき者へ

有島武郎

青空文庫を元としています
参考　：ウィキペディア

お前たちが大きくなって、一人前の人間に育ち上った時、――その時までお前たちのパパは生きているかいないか、それはわからない事だが、――父の書き残したものを繰広げて見る機会があるだろうと思う。その時この小さな書き物もお前たちの目の前に現われ出るだろう。時はどんどん移って行く。お前たちの父なる私がその時お前たちにどう映るか、それは想像も出来ない事だ。恐らく私が今ここで、過ぎ去ろうとする時代を嗤い憐れんでいるように、お前たちも私の古臭い心持を嗤い憐れむのかも知れない。私はお前たちの為にそうあらんことを祈っている。お前たちは遠慮なく私を踏台にして、高い遠い所に私を乗り越えて進まなければ間違っているのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にいるか、或いはいたかという事実は、永久にお前たちに必要なものだと私は思うのだ。お前たちがこの書き物を読んで、私の思想の未熟で頑固なのを嗤う間にも、私たちの愛はお前たちを暖め、慰め、励まし、人生の可能性をお前たちの心に味覚させずにおかないと私は思っている。だからこの書き物を私はお前たちにあてて書く。

お前たちは去年一人の、たった一人のママを永久に失ってしまった。お前たちは生まれると間もなく、生命に一番大事な養分を奪われてしまったのだ。お前たちの人生はそこで既に暗い。この間ある雑誌社が「私の母」という小さな感想をかけといって来た時、私は何の気もなく、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きている事だ」と書いてのけた。そして私の万年筆がそれを書き終えるか終えないに、私はすぐお前たちの事を思った。私の心は悪事でも働いたように痛かった。しかも事実は事実だ。私はその点で幸福だった。お前たちは不幸だ。恢復の途なく不幸だ。不幸な者たちよ。……(中略)……

小さき者よ。不幸なそして同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。そして暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。

行け。勇んで。小さき者よ。

「小さき者へ」

有島武郎作、大正七（一九一八）年発表の短編小説。

有島武郎（ありしまたけお、明治十一（一八七八）～大正十二（一九二三）年。小説家。「カインの末裔」「生まれ出づる悩み」「或る女」などを発表、白樺派として活躍した。

三十八歳の時妻安子をなくした有島が、子どもたちへの思いを込めて書き上げたのが、この「小さき者へ」である。

この中で、子どもたちに対して、厳しい境遇を乗り越え、自分を成長させる人間になってほしいという強い思いを繰り返し説いている。「斃れた親を喰いつくして力を貯える獅子の子のように、力強く勇ましく私を振り捨てて人生に乗り出して行くがいい」

有島は、妻や母を失うことは、世間ではありふれたことだという指摘をしながら、「私たちはそのありがちの事柄の中からも人生の淋しさに深くぶつかってみることが出来る。小さなことが小さなことでない。大きなことが大きなことでない。それは心一つだ」として、悲しみから人生を学ぶことを願っている。

妻や知人のM氏が亡くなったことに対する悲しみや、子どもたちの先行きに広がる人生の暗路を述べながら、気高く強く生きるように述べる。深い愛に満ちた、格調高い文章である。

なお、有島武郎は、後に女性との関係で、社会的非難を浴び、自殺することとなるが、この情感豊かな文章には、真実の愛が込められているように思われる。